



3. 独立

1975年、片上義春氏は、31歳のときに、当時の価格で1台当たり70～80万円の中古の豊田式自動織機9台（うち試作用1台）を購入し、織鶴タオル有限会社を立ち上げた。9台のすべてにドビー機を設置し、バスタオルとタオルマフラーを主力製品とした。

タオル工場の名前の由来であるが、片上の苗字をとって片上タオルでもよかったが、すでに片上タオルは存在していたため断念した。何か覚えてもらいやすい名前はないかと思案していたときに、最初に鶴の柄の織物をつくったのが縁で「織鶴」と名付けた。

創業初期の頃におもに生産したタオルは、花椿テリー（株）の
本家にあたる山田正布（株）からのオーダーでつくったボーダー柄のバスタオルであった。その後、米谷商事（株）（現在は閉鎖）と取引が始まり、バスタオルを中心に請負生産をおこなった。今治タオルと言えば、タオルケットが大ヒットしたが、織鶴タオルではタオルケットはあまりつくらなかった。その理由は、タオルケットは面積が広い分、目方もあるため利益は大きい、逆に面積が広い分、B級品になりやすい。そうなるとう損害は大きい。そこで、片上氏はタオルケットの製造はあるタイミングでやめてしまい、バスタオル、あるいはそれよりも小さいサイズのタオル生産に特化した。その結果、借金も減って経営が軌道に乗り出した。



独立後にオーダーを受けて生産した

ボーダー柄のタオル

織鶴タオルでは、設立からしばらくは他のタオル工場の賃織りをしており、また原料となる綿糸も支給してもらっていた。かれこれ15年ほどこのスタイルでタオル工場を運営していたが、その間も試行錯誤を重ねながらさまざまな生地のバスタオルをつくった。当時は小さなタオル工場が生き残るには下請けしか道はなかったが、片上氏は自らのタオル工場を立ち上げたときに心に誓ったことがある。それは、「人の真似は絶対せん。参考にはしてもその真似はせん。同じものはつくらん」である。

自ら製品開発をおこなうようになってからは、バスタオル以外のタオル製品も製造するようになった。今治タオルのヒット商品となったタオルマフラーは宮崎タオルの宮崎弦氏が苦節の末に商品化したものであるが、宮崎氏が産地にアイデアを解放したため、片上氏も長い間タオルマフラーをつくっている。片上氏は、故宮崎氏とは生前に交流があり、宮崎氏を次のように評価している。「先見の明もあるし、本当にタオルを愛した男じゃったね。マフラーをつくったときに『どうして特許とらんかったん？』って言うたら、『みんながつくったらええんじゃが』って言うてね。今治では異質な人でね。今あの人がおったら、一番力を発揮できるね。宮崎さんのような人はなかなかいませんよ」（宮崎弦氏については2014年12月～2015年3月の高橋俊明氏の記事を参照）。

誰も見たことのない、そんなタオル製品をつくりたい

片上氏は、独立後、誰もつくったことのない製品づくりを目指して技を磨いてきた。昔も今も変わらず、そのための努力は厭わない。その成果として、自動織機を使って職人の技を込めた特殊な生地の特許を取得したり、愛媛県から表彰されたりした。

特許取得に関しては、1995年3月に「織物地」として特許登録番号：2673342（出願番号：1995068819）し、翌年の9月に公開された「シェル織」は従来にないタオル生地である。その特徴は

「公開特許公報」から引用すると、「タックの腰を強くすることにより十分な通気性が得られると共にタックの腰の強さにより生地が強くってシャリ感が得られる」というものである。1997年から本格的に商品化され、綿や麻を使った介護用シートとして販売された。



麻糸で製織した「シエル織」

寝具のシートとして製品化された

特許取得に加えて、3件の意匠登録もある。まず、1995年4月に出願し1997年9月に登録されたボディマッサーシートタオル(登録意匠番号:0999851[出願番号:1995011000])、1996年12月に出願し1998年4月に登録されたウェーブ織(登録意匠番号:1012748[出願番号:1996039600])、そして1999年1月に出願し2000年3月に登録された織物地(市松模様のガーゼ織)(登録意匠番号:1072495[出願番号:1999000363])である。



市松模様のガーゼ織

（登録意匠番号：1072495）



ボディマッサージタオルの生地

（登録意匠番号：0999851）

特許にしても意匠にしても、その登録にはコストがかかり、しかも一人で事務的手続きをおこなうには手間がかかり過ぎる。個人事業主として片上氏の特許や意匠の登録数は地元でも多い方であるが、それでも開発した製品のごく一部に留まる。片上氏に特許を積極的に取得しない理由を聞くと、「お金もかかるしね。真似できるんやったらしたらええ、という考えが基本的にあります」という答えが返ってきた。

先に述べたように、片上氏が開発したタオル生地のうち特許取得や意匠登録されたものは氷山の一角であり、独立してから新たに試作・開発したタオル生地は何百とあり数え切れないほどある。3分の1は、失敗作のなかから新しい生地が生まれる。そのうち、片上氏が気に入った製品にのみ名前が付けられている。「シェル織」に加え、長いパイルに特徴がある「スーパーロング織」。これは、片上氏がタオル織機を改造してデニム用につくったものである。その他にも、縮み感が心地よい「ジョーモン織」、もじりパイル織りの「シュールド織」などがある。




「ジョーモン織」のショール



「フライコットン」のタオルマフラー（左）と「スラブウール」のタオルマフラー（右）

多種の特徴ある自社開発製品によって織鶴タオルは、1999年に愛媛県主催の「えひめ暮らしの工芸品デザインコンクール」で「デザイン賞」、2000年におなじく「えひめ暮らしの工芸品デザインコンクール」で「技術賞」をつづけて受賞した。

革新織機の時代にあって自動織機を使って多様な生地を生み出す織鶴タオルの評判は徐々に広まり、ある日、噂を嗅ぎつけた日本放送協会（NHK）のディレクターが片上氏にインタビューに訪れた。かれは、片上氏の堅物ではあるがモノづくりに対する姿勢に感銘を受け、2001年にNHK総合テレビの「生活ほっとモーニング」で片上氏を20分間にわたって特集した。JAPANブランド育成支援事業によって今治タオルが有名になる以前の放送であったが、全国放映されたため反響は大きかった。その日から織鶴タオルの事務所の電話は鳴りっ放しで注文が殺到し、自動織機による生産では到底追いつかない状態がしばらくつづいた。

片上氏は、唯一無二のモノづくりを武器に独立してから数社のタオルメーカーやタオル問屋と取引をしていたが、基本的には直販を目指してきた。その理由は、自ら納得するものをつくりたいという気持ちと、タオルをつくるメーカーと流通を担う問屋は対等の立場にあるという信念があったからである。現実には、自ら納得するものをつくろうとすると問屋からクレームが入ったり、市場に近いところにいる問屋がメーカーより力を持っていたり、難しい局面に何度も出くわした。

苦くも信念を貫いた経験をひとつ挙げると、寝具をおもに扱う大手の問屋兼メーカーのN社と以前取引があった片上氏は、片上氏が開発した製品にN社のネームを付けると慣例のごとく打診されたため、「それはブランドじゃない。メーカーのネームを付けて初めてブランドになる。本当のブランドというのは、つくったメーカーのネームを付けるのが本当のブランドじゃないか」と大手企業を相手に喝破した。その結果、取引がストップしたことがある。ここに職人としての誇りを垣間見ることができると、利益を考えるとそう簡

単に誰もが決断できるものではない。それゆえに、片上氏はつねに最終消費者と直接向き合えるモノづくりにこだわったとも言える。この意味で、NHKの番組でとり上げられたことやインターネットの普及は、織鶴タオルにとって商機ともなった。

しかし、モノづくりを追求しそれをマーケットに乗せて売る、という一連の作業を一人の職人がおこなうには相当なしんどさをとまなう。「売らんといかんのやけど、やっぱしうちらみたいな小さいとこやったら、商売に力を入れてたらモノづくりの方が留守になる。モノづくりに徹してたら売る方が留守になる。どっちにウェイトを置くかというたら、モノづくりに徹した方が良からうかとおもって、それでいろんな製品を開発してきたんよね。もともと好きじゃなかったらできんです。好きじゃないとできんとおもいますよ。」この言葉に、生粋の職人から滲み出る不器用さが感じとれるが、この不器用さが職人の証でもある。


今は本物を求める時代だからこそ、使って納得できるもの、お客さまのニーズにあったものを目指している

製品のアイディアは、頭のなかにインプットされた昔から今に至る情報の引き出しからとり出すことが多い。たとえば、前号（2020年12月号）でも触れたが、広洋タオル時代に大阪市中之島にあった大阪国際貿易センターで開催された織物の展示会には頻繁に足を運び、インスピレーションを得た。印象に残っているのは（株）川島織物によるもじり織りであり、独立してから昔に見たもじり織りが頭に浮かび、「もじり織りとタオルのパイルを組み合わせると面白い製品ができる」と思い立ち、試作したのち商品化した。それが「シユルード織」である。こうした昔に見た製品からアイディアを得ることもあれば、松山市にある高島屋で展示会があると聞けばすぐに情報収集しに出かけ、展示物からアイディアを得ることもある。モノづくりの職人は、展示されている品物を見るだけで製造工程が頭


に浮かぶため、見るだけで創造力を掻き立てられ刺激になる。

最近では、「人に優しいタオル、幸せになるタオル、心が豊かになれるタオルを織るタオル屋」をモットーに、なるべく天然素材にこだわっている。綿糸はもちろんのこと、絹糸や麻糸、変わり種としては紙の糸も使う。「紙の糸を使ってシーツを織ったら、断熱性があるってさらっとしとるから最高のシーツができるんよね」と片上氏。この紙のシーツは商品化されていないのが残念であるが、創意工夫を凝らした製品がこの小さな工場から日々生まれている。

このように、織鶴タオルでは、豊田式自動織機を使った各種サイズのタオルやタオルマフラー、その他アパレル生地などが一つひとつ手間をかけて少量生産されている。とりわけ、タオルマフラーと綿や絹、麻、ウールなどの天然素材との相性はよく、吸収性に優れ速乾性の高いオリジナルのマフラーは織鶴タオルのヒット商品である。素材を変えることによって、オールシーズンで活用できる。

天然素材の魅力に開眼したきっかけは、2000年頃、今治在住の染色家・村尾草染  氏との出会いにあった。村尾氏の草木染めの特徴は多色にある。通常、草木染めは単色だが、板を用いて染める板染めの技法によって複雑で繊細な柄を生み出している。村尾氏の草木染めに惚れた込んだ片上氏は、草木染めの醍醐味について村尾氏から学びながら、安心・安全で人に優しく暖かさを感じるマフラーを丁寧につくっている。

また、2008年頃から片上氏が考案し商品化した「三重織」のバスタオルやタオルケット、フェイスタオル、シーツ、ミニハンカチなども織鶴タオルの売れ筋商品である。三重織は、無撚糸を使用したカーゼ織を三重にしたもので、軽量で柔らかく赤ちゃんのおくるみに最適である。技術的には六重織、それ以上も可能であるが、加重されるため三重織を主軸としている。三重織の製品には、プリントや草木染めの製品もある。

片上氏と似たモノづくりの精神でタオルをつくっている仲間のひとりが、大成タオル（株）  の製織技術者・江原公臣氏である。

片上氏より少し若く、広洋タオル時代の同僚である。大成タオルが技術者を探していたときに片上氏が江原氏を推薦した縁もある。モノづくりについて忌憚のない意見を交わせる同士である。

その他、タオルは細かい分業によってつくられるが、織鶴タオルの製品に欠かせない原糸の供給は都築紡績（株）に依頼しており、染色工程ではおなじ今治にある同心染工（株）と取引している。

（次号につづく）

